



対
談

佐々木 長生

福島県立博物館・専門学芸員

×

河野 通明

神奈川大学日本常民文化研究所・教授

『民具が語る列島の歴史』

民具との出会いと研究の方向性

今日は、民具という非文字資料を通して何が明らかになるのか、お二人にうかがいます。まずは、民具との出会いについて一言ずつお願いします。

佐々木 私は、大学を出るとすぐ会津民俗館に勤務しましたが、民俗学の信仰とか昔話とかを中心にやっていたものですから、どうしても民具ってというのはなじめなっていました。その時ちょうど蠟燭を作る道具を国指定にしようという仕事が昭和50年ごろから始まりましてね、その蠟燭を作る道具を集めて並べることによって、話をする人も道具を見て、すらすら、すらすらと、話してくれるんですね。あっ、モノから伝承を語らしめる、これが民具研究かなって思いましたね、それから私は、モノを窓口にして伝承を掘り起こすってことから、民具研究に入りました。そういった中で民具研究講座が、旧常民文化研究所の主催で開かれて、そこに参加したんです。また、民具学会ができて多くの仲間ができて、張り合いが出てきたっていうのがきっかけです。

河野 私の場合は文献史学の古代史が出发点です。1960年代の初めですから、史的唯物論の方法が全盛でした。その前に実証主義の古代史があり、たしかに精緻な研究ですが、感動が伝わってこない。それで「土台が上部構造を規定する」という唯物史観の捉え方に魅力を感じて、社会の基底となる経済、生産力の研究が大事だということで荘園の社会経済史に取り組んだ。しかし振り返ると、文献資料による荘園研究というのは生産関係の研究であ

り、生産力の研究ではない。出来上がった米を年貢としてどう取り立てるかは記録されるが、生産現場の様子はでてこない。生産力にかかわる農業技術史には古島敏雄氏の大著がありますが、文献によりかかった研究で図版が1枚も出ておらず、道具の姿は見えないんです。技術の進歩は道具の形の変化として現れるものなのに、これではアカンということで、関西を中心に民具収蔵庫回りを始めたのが1981年です。私にとっての民具は歴史研究の材料であり、民具を通して歴史を、社会構造を研究するという姿勢で一貫してやってきました。

ある意味で対照的ですね。佐々木さんは、会津という地域の博物館という現場で、河野さんは、大学の中で、資料としての民具の可能性に気づく。

佐々木 私は1973年に会津民俗館という、膨大な民俗資料があるところに赴任しましたが、最初の半年間ぐらいは、民具が置いてあっても、またいで歩いてたんですね。磐梯山信仰とか、飯豊山信仰とか、そういうのをやりたいたって思っていました。そのとき文化庁の木下忠先生がおいになって、民具を見て「佐々木さん、これは、宝の山ですね」と言うんですね。宝の山っていうことは分かるんですが。会津磐梯山は宝の山ですから(笑)。どこに金脈があるか分からなかった。そんな時に、1979年から、常民文化研究所の紀年銘民具の調査が全国一斉に行われました。そこで会津民俗館にあるものをみんな引っ張り出すと紀年銘が百何件くらい出てくる出てくる。江戸時代も元文年間とかですね。それまで民俗学は、伝承

ばかり重んじて歴史性がないと言われていました。学生の時もよくそういう論争をしたこともありましたが、答えがでなかった。ところが会津民俗館に来て、紀年銘民具調査をやったときに初めて、これで民具、民俗の中にも歴史が裏づけられるじゃないか、って民具研究の面白みを発見しました。また、田島に文化5年の唐箕があるとなれば、唐箕はいつごろからあったんだろうと『会津農書』を紐解いたんですね。その時に河岡武春先生に、せっかく調べたものは報告しなさいといわれて『民具マンスリー』に、貞享元(1684)年の『会津農書』に唐箕が会津地方で使われていたと書きました。ところがそれが日本で一番古い唐箕の記録だったんですね。そして会津には『会津農書』に1年おくれで、寛文5年の『風俗帳』とか、貞享2年の『風俗帳』とか、文化6年の『新編会津風土記』とか、うんと記録があって、そこで、風俗習慣とかいっぱい載ってくるんですね。つまり会津はモノが豊富である、伝承が豊富である、そしてその裏づける文献、記録がある。この3つを重ねることによって、民具を窓口にした私なりの民俗学研究ができる。これが私の今やっている民俗学研究なり、民具研究ですね。

河野 私の場合は、収蔵庫回りを続けていくうち、ダーウィンの進化論の方法と同じだと気がついたんです。ダーウィンは、いま生きている生物を比較して進化の程度の差を見出し、それを縦軸に置き換えて進化論をたてた。民具でも同じことが言えるんです。収蔵庫の農具類も比較するとより古いタイプ、より進化したタイプがあり、その形態の違いを縦軸に並べ換えて発展を見通せた。また、国語史をやりたかった私は、民具の呼称を伝来の年代を決める手がかりとしています。紀伊半島では牛の首木には首かせ棒が付いていて、ウナグラと呼ぶんですが、ウナグラという呼称から、首筋をウナジではなくウナと呼んでいた時代に伝わったということで6世紀に絞れた。首かせ付き首木は朝鮮半島系のもので、6世紀に朝鮮系渡来人が犁を持ち込んだことが証明できた。馬鍬についても、全国的にウマグワ系の呼称が使われていることから、馬しかいなかった時代に伝来したことになり、5世紀に中国の江南から伝来したことが論証できました。

民具における連続性と非連続性

変る脱穀調製具、変らぬ耕起具

民具資料に歴史性を認めながら、佐々木さんは地

域の中で生きている民具誌に基づきながら民具の来歴を追い、河野さんは個別民具を全国レベルで、広域的に形態を中心に検討する研究法をとるわけですね。

佐々木 会津民俗館は喜多方市の奥に立地する熱塩加納村出身の渡辺^{つとむ}聖さんが1967年に創った博物館です。元は、只見町の馬宿、茅葺き民家を移築したドライブインでした。高度経済成長期に、ふるさとブームが起きる。山口弥一郎・岩崎敏夫先生が民家や民具保存の重要性を訴え、収集を指導しました。最初は会津民俗資料館と言っていたのですが、印刷物がミスプリで資料の字が抜けてしまったので、ああ民俗館の方がいんでねえかって、民俗館になったんです。会津が「民俗館」の元祖ですね(笑) 4~11月までは日中は売店に出てハッピー着て、観光客相手の売り子になって、主に夜勉強したんです。冬期間は、寝具・仕事着・製蠶用具コレクションを整理して県・国指定にするなど無我夢中で働きました。この民具が分からないとなると、すぐそのモノを持ってお婆ちゃんの所へすつとんで行って、これ、なんだ?なんだ?って、聞いて歩いた。いま思うと、いつの間にかモノを持ちながらの民俗研究を自然に教えられた。館も、財団法人化、登録博物館と観光的な資料館から学術的な博物館に変わっていききました。今なら「観光民俗学」でいくつも論文が書けます。そういう意味では、私は会津民俗館の成長とともに、モノから民具研究を教えられたっていう、まさにほんとに、叩き上げの学芸員になって気がします。ですから理論には弱いのです(笑)

河野 その点は私も同類、佐々木さんのモノから学ぶ姿勢に共感します。理論を云々するより収蔵庫でモノを見ているほうがワクワクする方です。学という「学」^{がく}縁はなくても研究は出来る。夢中で研究していれば方法論は後からついてくるものです。まず絵を描くことが先で、絵がよければ額縁は絵が出来上がってからつければよいわけです。ところで民具を扱いながら私と佐々木さんとの相違点は、対象とする農具の違いです。佐々木さんは脱穀調製具を体系的に研究している日本で唯一の人です。千歯扱や唐箕の個別研究をする人はいますが脱穀調製の流れ全体を捉えようとしているのは佐々木さんだけです。私が、堀家本『四季耕作図巻』で篩としたものを、佐々木さんがコリワと訂正されたのには教えられました。私の研究は、耕起具系統で、古代に遡る研究です。大正・昭和の農具から、なんで古代が見えるのかと聞いて



対談

てくる人は、道具は時代と共に変わるものだと考えている。ところが道具はそれほど変わるものではなく、そこに法則性があることが見えてきた。生活用具と生産用具に分けると、生活用具はどんどん変わるのに比べて生産用具は変わらない。生活用具は人間の都合でいくらでも変えられる。ところが生産用具は相手が自然であり簡単に変えられない。また農具に限定すると、稲刈りを境にして、以後の脱穀調製具は割と変わる。千歯扱が発明されると全国に千歯扱が普及する。唐箕^{からすき}が伝わり、全国的に普及する。それに比べると、鎌^{まくわ}とか犁^{からすき}とか馬鎌^{まくわ}とかいった耕起具は変わりにくい。また人が使う鎌と、牛や馬に引かせる犁や馬鎌と比べると、牛や馬に引かせる方が変らない。理由の一つは所有形態で、鎌は個人持ちで、手の延長として個人の裁量で変えられるが、犁や馬鎌は家に付属し、飼養など全体がシステムになっているのでたぶん変わりにくい。耕起具という一番変わりにくい農具だからこそ古代まで遡れる。

佐々木 確かに、6~7世紀頃の福島県相馬市大森遺跡、8世紀の山形県の上浅川遺跡出土の馬鎌の形態は、歯が木製か鉄製かの違いだけで、近年まであった馬鎌と変わりませんね。静岡市の瀬名遺跡・登呂遺跡出土の田下駄、横に長いナンバは、貞享2年の『猪苗代川東組萬風俗改帳』に記載があるし、猪苗代湖周辺では昭和35~6年頃まで使われていました。耕作用具は、ほとんど変わっていないといえます。また、会津地方では、全国的に消滅したモノが実際に使用されています。粟や稷の穂摘み具、コウガイは青森・岩手・秋田県あたりの平安期頃までの遺跡から出てきます。調製具である汰桶^{ゆりおけ}は、他地域では福井



河野 通明

神奈川県立日本常民文化研究所・教授

県勝山市の祭礼や、『絵本通宝志』の絵に描かれているように、供物を頭上運搬する形で残っているだけです。会津では、民具から、残存性または共存性が読み取れ、地域民俗の連続性を認めることができるのです。

犁・牛馬耕の普及

河野 もう少し農具が変わらないという話を続けると、現代社会は、より良い暮らしを目指してどんどんモノが変わっているけれど、飢饉や疫病にさらされていた中世以前の前近代では、これまで通りの生活が維持できるかどうか勝負です。駅伝ではチームの誇りをかけて走者の間で襷をつなぎますが、前近代の人々は家族の生存をかけて、世代の間で犁をつないでいく。生命がかかっているのでリスクは避けて、先祖代々使ってきて安全性が証明済みの農具を子孫に伝える、壊れても同じ形のまま作っては伝えていく。農具は20年ぐらいで壊れるとして、100年で5回、犁は7世紀に形が固定して以来、65回ほど更新しながらも形を変えずにきてるんです。6世紀に伝わった紀伊半島のウナグラも朝鮮半島の首木と同形であり、6世紀に枝分かれしてお互い変わらないまま20世紀まで来てしまった。山口県に伝わるウナグラも、中国の山東省のものと変わらない。おそらく7世紀に入ってきたもので、1300年間も形は変わっていない。

佐々木 会津には不要になったモノでも、3年取っておくとまた、シャバに出るとい言葉があります。だから、絶対に形にあるものは捨てるなといひます。また、石臼の引き木が折れたとき、その日のうちに替えが見つからなければ家人が死ぬといひます。予備を必ず用意して置けといひています。モノが少ない時代、農民は新しい物が流行しても、すぐに飛びつかない。また焼き畑をやっていた所、収穫量も少ない所では、大きな道具、発達した道具はいらない。伝統的な作り方を変えることなく踏襲する。ナンバなんか、湿田ではあれ以上のものはないですよ。そういうことは、文書や伝承では語れない、民具、モノがあるから語れるんです。

河野 牛に引かせる犁は、カラスキという名前からしても日本人の発明ではない。明治以来、戦後にいたるまで、日本で発明され進化したという学説が繰り返して主張されてきましたが、これは間違いです。日本には朝鮮半島からは三角枠で無床犁系統、中国からは、四角枠で長床犁系統が入ってきます。日本の在来の犁は実に複雑多様で、

嵐嘉一さんは0型から5型、亜型含め7つ分類した。私も色々考えたけれども、結論的には中国系・朝鮮系・混血型としました。混血となれば、どちらの遺伝子をどの程度引継ぐかでパラエティーがあるわけで、これで日本の在来犁の多様性は一応説明がつく。もう1点、農具の形態については、地形・土壌への適応の結果だとこれまで説明されてきた。そのため歴史が見えなかったんです。長床犁は水田適応型、無床犁は畑作用と説明されてきましたが、現実には関西では山田でも平野でも粘土質でも砂地でも、全部、長床犁を使う。九州では無床犁の抱持立犁を、畑でも水田でも使っています。

佐々木 東北地方は、馬鍬も使っているのに、明治中期まで、犁が使われませんでした。『耕稼春秋』、『農業図』などを見ると石川県あたりまで犁で耕している。東北地方などは三本鍬での田起こしをし、何故、便利な犁を導入しなかったのか？

河野 日本には6世紀に朝鮮系渡来人により初めて犁が入る。東北は、蝦夷^{えみし}の世界で大和政権の支配圏外だったので、入らない。大化改新政府も中国系犁を普及させますが、それも支配下しか伝わらない。只見には小型の無床犁がありますが、あれは栃木県につながるもので、7世紀の百濟・高句麗難民の持ち込んだものかも知れない。その辺りが在来犁の北限で、東北地方の大部分には江戸時代まで犁が無かった。私は今のところ、そう考えています。鹿児島も、薩摩藩が17世紀半ばに殖産興業策として長床犁を導入しますが、それ以前は犁はなかった。薩摩は律令政府に頑強に抵抗していた隼人の地で、7世紀には大和の領域に入っていません。つまり朝鮮系渡来人が来たり、また大化改新政府が長床犁のモデルを配布した、そうした7世紀の時点で国家の領域に入っていたかどうかという、高度な政治的条件が犁の分布を決めているようですね。ということは逆に、犁の分布から古代の政治まで見えるということになります。

佐々木 明治には東北地方に福岡県の林遠里の所から馬耕教師がきています。庄内地方には、明治30年代頃の絵馬が残っています。背広着て山高帽を被って馬耕している姿。しかし、東北地方は冷風ヤマセ、冷水で田を大きくできない。田を小さくして水温を上げる。その灌漑・排水の設備も無いから、棚田形式になる。馬耕の条件が整っていない。今の圃場整備と同じです。コンバインとか大型トラクターが入るために三反規模の田になります。



佐々木 長生
福島県立博物館・専門学芸員

河野 東北には引手なしの馬鍬があります。馬鍬は一般に牛馬の方に向かって2本の棒が出ていて、その先に縄をつける。中国・東南アジアから韓国・日本を含めてすべて引き手がついています。ところが東北地方の馬鍬にはない。他所での使用例を見て、記憶に留め再現製作した時に、使用状態では引き手と引き綱は一直線なので、見落としてしまったと考えられます。他方、東北地方には引き手付きの關東中部型馬鍬も点々と鳥状に分布する。律令期に城柵^{きのへ}の柵戸として移住させられた屯田兵が持ち込んだものと推測されます。これを真似たのが引手なし馬鍬なのでしょう。民具調査から東北の古代が見えてきた気がします。

民具の中の伝統性、持続性、連続性に注目されている訳ですが、逆に、モノが変わる契機は何でしょうか。

河野 日本でモノが変わる契機といえば、朝鮮半島や中国から新しいものが入ってくるというのが大きい。6~7世紀の朝鮮系渡来人は牛や犁、木摺臼、背負子も持ち込んだ可能性が高い。平安後期からの日宋貿易では結桶など中国江南地方の生活用品が入ってくる。とくに禅宗寺院の台所から石臼・蒸籠など、粉食文化に関するものがどっと入ってくる。16世紀末の秀吉の朝鮮侵略の時には、大名や従軍した兵たち、彼らは農民ですから脱穀用のコキバシを持って帰ってくる。カラハシという呼称が残っていることからこのときでしょう。戦国時代から江戸時代には、中国江南地方から土摺臼や唐箕・唐鍬・備中鍬などが、さみだれ的に入ってきますね。それに政府や大名の



対談

殖産興業政策も無視できない。古墳時代の大和政権は江南地方から馬鍬を導入しましたし、大化改新政府は唐から長床犁を入手して、改良を加えてそのモデルを全国にばらまいたらしい。江戸時代には加賀藩や薩摩藩が長床犁を馬耕という形で藩内に広めた。これらはみな民具の痕跡から復元できました。商業が盛んになって、千歯扱や万石など、日本独自の農具が発明されるのは江戸時代になってからです。こうして振り返ってみると、日本の技術革新は、アジアからの刺激がたいへん大きい。これまで何となく信じられてきた、農民たちは先祖代々その土地の風土に合わせて、少しずつ農具を改良してきた。それが千年の年月を経て、今われわれが見るような、各地さまざまな農具になった、というのはほとんど神話ですね。

地域農業資料としての農書

農書は、当時の地域農業の実態をどの程度反映しているのか、あるいはそもそも農書の書かれた目的はなんだったのでしょうか。

佐々木 農書はおおよそ元禄時代から各地で、自立したばかりの小農民、本百姓を指導するために書かれました。作者は主に学者・上層農民・下級武士で、実務的な農書は上層農民の書いたものです。中でも、時代が早く、著述舞台が明確なのが、1684年刊の『会津農書』です。宮崎安貞の『農業全書』よりも、13年も早い。土の重さ、色、味が調べられ、その結果を黒土、黄真土、白土と全部で9種類に分けるなど、作者佐瀬と次右衛門の自らの実体験と、磐梯山に残雪が虚無僧の姿になったら、種初の時き時、イモチ病のときには笹を立てるなど「郷談」といわれる昔からの言い伝えが記されています。中国の農書、『王禎農書』を参考にすると、元禄5(1692)年～宝永4(1707)年間の天気が全て記されています。さらに、農耕儀礼など前代、中世会津の民俗が書かれ民俗学的資料としても使えます。凶作回避、寒冷地会津における作物連鎖、作付け体系に目配りが利いた、土作り重視の有機農法書です。近年、寛延元(1748)年の『会津農書』の写しも出ました。107点の農具の解説がなされ、延宝年間の汰板の使用、汰桶から京篩に、さらに板篩への変遷などが記載されています。木摺臼の材料が、明暦・万治期から、ブナから松にかわり、両縄から片縄になり作業能率が倍になったことなどが記されています。近世農具の使用年代を位置づける貴重な学術資料として高い価

値を持っています。

絵農書もありますね。

佐々木 絵農書といっても、農耕図屏風、四季耕作図屏風、農業図、絵馬などがあります。風俗書上帳の中に、宝暦13(1763)年の『北郷鄙土産憐民政要』上下2冊が、残っています。会津地方には、狩野派や四条派を学んだ農民出身の画家、佐藤沢準、遠藤香村らがいて、農耕図屏風や絵馬を描いています。絵は上手くはないけれど、会津地方の農具、風俗を忠実に描いています。仕事着のサルツパカマ(猿袴)を着ている姿など絵農書から、当時の農業・農民姿が復元出来ます。

河野 『会津農書』の記述と現実の民具分布とのずれ、菅江真澄の摺臼図との比較も面白い課題です。日本の伝統的な木摺臼は、お尻を地面につけ二人が向き合って歌を唄いリズムを取りながら引く縄引き方式ですが、『会津農書』には延宝(1673～81)の頃より「片縄引」が始まった。この片縄引きは両縄引きより仕事ははかどるといっている。菅江真澄の『百臼之図』(異文一)には縄引き型を「もろてびき」、縄穴に棒を突っ込んだタイプを「片手曳」と記している。これらについては諸手引き=両縄引き=縄引き方式とし、片手曳=片縄引=棒挿し方式とするのが妥当でしょう。この棒挿し方式はクランク駆動なのでわたしはクランク型とも呼んでるんですが、民具ではこのタイプは岩手中南部が中心で山形県にも若干ありますが、福島県で見たのは今のところ縄引き方式だけです。となると『会津農書』に指摘している17世紀の改良は、岩手あたりが発信源だが会津にはあまり及んでいない。また『会津農書』には木摺臼には「往古よりぶなの木ばかり用い來たる。明暦、万治(1655～1661)のころより、松木をも用いるなり」と言ってるんですが、民具



縄引き型
福島県金山町・こぶし館



クランク型
岩手県大東町・岩手県立農業科学博物館

では東北地方全域、東北以外も松一色なのに対して、会津では広葉樹のようなものが混じっている。『会津農書』の記述と民具分布には若干のズレがあるんですね。これは今後の研究課題です。

民具からの文化情報発信

今では、インターネットですが、渋澤敬三は人と人のネットワークによる民具資料の情報化システムを考えました。

佐々木 民具研究講座、民具学会も設立後30年以上経ちました。民具の個別的研究は細分化し進みましたが、全国的な位置づけがわからない。会津地方では、農書・風俗帳なども合わせ、汰板に年号が無くて、次の万石の年号から、また半唐箕の一番古い紀年銘が天保期ということになるなど、およそ脱穀・調製具の変遷が時系列で推測できるまでになりました。旧日本常民文化研究所が1979年に行った紀年銘民具の調査のような全国的な調査を、再度提案したいと思います。

河野 民具は懐かしいけれども、かさが高いし、汚いし、珍しくもない。市町村合併もあり、収蔵された民具も危ない。それで民具から何が言えるのかと問われたとき、私は、民具から地域の古代史が見えますと答えている。これまでの古代史研究は、『日本書紀』や『古事記』に依っているので、地域は都近辺が中心、階層では天皇・貴族、中身は政治・外交、しかも、事件性のあることに限られます。そうすると、一般庶民の日常生活を支える生産やら生活が見えてこない。ところが、民具は全国どこにでもあって、比較研究をやれば、それぞれの地域の古代が復元でき、しかも、この地域のこの辺には6世紀渡来人がいたよ、7世紀には百済・高句麗難民がこの辺に住んでいたよと示せる。地域の民俗分布図まで描けるような情報を提示できる。民具の現状を考えると、研究でそれを引き出し、学会発表するだけでは不十分で、その成果を地元に戻し、地域住民が、地域とはなにかともう一度考え直す時、一番大切なものが民具だということの認識のもと、住民運動で民具を守るような運動を起さないと、民具は守れないところまで来ている。

佐々木さんは只見方式という、住民自らが民具の



語り合いの中で民具カードを作成する只見町の人たち

記録化、保存活用をはかっている運動の推進者です。
佐々木 只見町の山村生産用具と仕事着コレクション、2,333点が、国指定になりました。実際、民具を製作したり、使用してきたおじいちゃんやおばあちゃんが、孫に語る気持ちでカードを作り、実際に使う姿を写真撮影し記録化しました。自ら整理したカードをもとに、『図説 会津只見の民具』という本を作りました。1,000冊の本が、わずか、40日で完売しました。学術的価値も高いわけです。それ以上に、民具を通して地域の自然・歴史・民俗を再認識するきっかけとなりました。只見の商業、「ここはまだ携帯電話が通じません」という中学生の言葉には自然の恵みを感じます(笑) そんな過疎の山村の住民が自身の地域の文化に誇りを持つようになり、ブナ林を世界遺産へ登録する運動が現在進められています。かつては、骨董屋が来て、蔵ごと民具を買っていった。今は誰も売ることもなく、逆に、民具をみんなで作るようになっています。アケビ・マタタビ蔓細工とかの民俗技術が遺されようとしています。只見町の民具資料の保存と活用の事例を、中国など今まさに民具が省みられなくなっている近代化の途次にある国の研究者や地域住民に紹介したいです。

今回は、学術資料としての民具だけでなく、地域の人々にとって生活を再考する資料として活用されている具体例まで教えていただきました。長時間にわたり、ありがとうございました。

(2005年1月24日 COE共同研究室、聞き手：佐野賢治 記録：関ひかる・網野暁)